

殘菊宴

〔公事根源〕十月殘菊宴

五日

昔菊花ゑんは九月九日にて、又殘菊のえんとて、十月五日に行はれし也、是も群臣詩を作酒をたまふ事重陽におなじ。

〔空穂物語〕菊の宴かくてしも月の朔日ごろのこれるきくのえむきこしめしけるに、みこたちかむたちめまゐり給はかせ文人等めしてふみつくらせ御あそびなどし給。

〔年中行事秘抄〕十月殘菊宴事近來不行

〔年中行事故實考〕十月殘菊宴 上代禁中にて、十月五日殘菊の宴とて公卿を饗せらる、これは古

へ菊を愛せし事ふかきゆる禁庭にも菊を植られ王卿に見せたまふを殘菊宴といふ、菊花は九月九日を節とする故、重陽過ぬれば殘菊といふなり、いまはたえてなし。

〔三體詩〕三十日菊

鄭谷

節去蜂愁蝶不知、曉庭還繞折殘枝、自緣今日人心別、未必秋香一夜衰。

〔類聚國史〕七十五歲時延曆十六年十月癸亥、二十日曲宴酒酣皇帝桓武歌曰、己乃己呂乃志具禮乃阿米爾

菊乃波奈、知利會之奴倍伎阿多良、蘇乃香乎、賜五位已上衣被。

○按ズルニ、十月菊花ヲ賞スル事、始テ此ニ見ユ。

〔本朝文粹〕詔停九日宴十月行詔世號殘菊宴

後江相公綱朝

詔望五雲而穿眼、汾水之遊不歸攀九霞而摧心、荆岫之駕彌遠、九月九日者、先帝醒昇霞之月也、故

九日之節廢而經年、丹藥無驗、徒傳禦寒之方、黃菊失時、空綴泣露之萼、朕之長恨、千秋無窮、爰洛水春遊、昔日閣筆、商飈秋菊、今時卷筵、鹿鳴再停、人心不樂、詞人才子、漸吞吟詠之聲、詩境文場、已爲寂寞之

地、孔子曰、文王已沒、文不在茲乎、宜開良燕於十月之首、以翫餘芳於五美之藂、凡厥儀式、一准重陽主